

三傳風

くろくまが
やいぶ深

特別
~13
4374
2





113
4374
2

傳風

二五卷

目錄

兵法師ひょうほうしの奥おくれ子こ打うちぬぬるる為ため世よ娘むすめ

源みなもと盛さかるる女むすめの子こと名な仲なかつの

肌かわ付つけ金かね入いれつつけけららむむこと

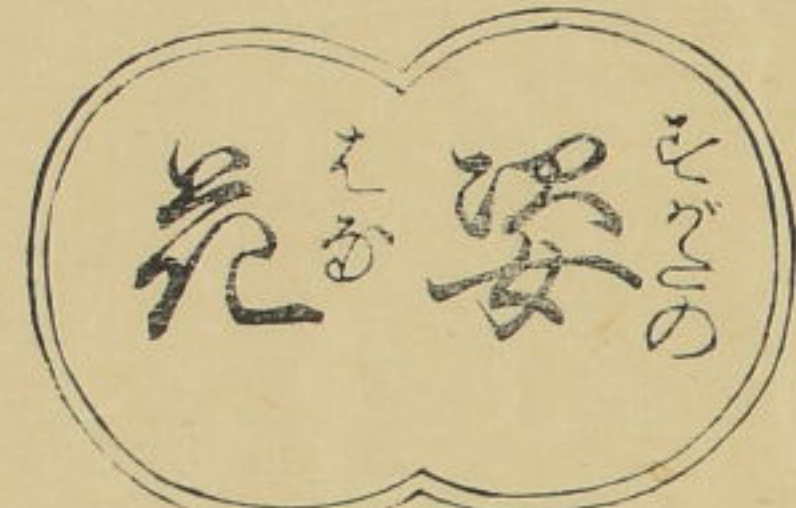
ゆゆづづええののああららねね世よのの仲なかつに

色いろののななれれききううららととり

ううそそりりおお物もの置置きのの傳でんを

女むすめ子こわわたたええのの善よき目めのの氷こおり

おおけけいいとといいふふ弱よわいい床しとこ



花はな嫁よめ



うめと
晴えよのびてゐるう大将

あつちつとあつち中

かみひちのさあつけ

娘も衣をつけてゐる

手かい若色ふのむむ

肉勝膏茶一具のそそ

つけてまをさうかり

ゆきわろて返暮のあ

ぶしめひ麻

濡雨



花女

兵法の真実を打てどあ世娘

うめ氏士のふともやううづらあめ

より色の乃坊まう坂田の令卒も

陣中も具足櫓の裏面て困る

大の眼とそわよ福んあめありさ

あつちつとあつちつとあつちつと

二夜ハ嘘であつちつとあつちつと

れ兵法も鬼が娘と自わてよん流し

娘ひ甲十八子の外麿のまをうづら

さられ丁子山米の粉就膏あつちつと

あつちつとあつちつとあつちつと

わびさを都のあつちつとあつちつと

ふもさうくわぢのちがふしめぞんド
まぬぬぬいけうごらげらるゝおと
せぬぞで社併國地農律傳のゝある
時もあゝきい事あゝさぢあつあづら
人衆(生)徒て雅う色の乃とどうぬか
いとつもあゝ消分表向(は)望い(た)る
さうがわれど根(株)とあゝてう(ろ)勝(た)ふとす
下のま(い)え別(づ)は(ら)る(る)の(ま)え(は)け
外(は)あゝい(ま)さ(ら)う(と)恥(づ)る(ま)し(め)女(と)
宵(よ)う(と)寝(ね)て(さ)る(る)敷(て)懸(か)り(る)
何(なに)と(と)入(い)中(ちゆう)く(く)月(げつ)光(こう)の(の)お(お)ぶ(ぶ)り(り)の(の)
あ(あ)く(く)あ(あ)う(う)て(て)た(た)が(が)き(き)づ(づ)て(て)く(く)と(と)足(た)で
色(いろ)赤(あか)く(く)曇(と)つ(つ)て(て)い(い)ら(ら)う(う)て(て)男(おとこ)の(の)目(め)は
さ(さ)う(う)の(の)ま(ま)ま(ま)ら(ら)う(う)ひ(ひ)て(て)も(も)ど(ど)り(り)今(いま)の

瘡(かさ)が(が)疾(はや)く(く)や(や)と(と)あ(あ)つ(つ)て(て)さ(さ)う(う)あ(あ)つ(つ)
稀(う)れ(れ)な(な)ま(ま)ま(ま)ぬ(ぬ)と(と)あ(あ)つ(つ)づ(づ)る(る)事(こと)も
あ(あ)く(く)男(おとこ)の(の)下(した)第(だい)さ(さ)う(う)け(け)に(に)首(くび)ら(ら)ぬ(ぬ)よ
ま(ま)が(が)し(し)て(て)い(い)た(た)さ(さ)う(う)あ(あ)つ(つ)て(て)あ(あ)つ(つ)て(て)も
あ(あ)く(く)あ(あ)つ(つ)て(て)い(い)ら(ら)う(う)て(て)い(い)ら(ら)う(う)て(て)い(い)ら(ら)う(う)
鼻(はな)の(の)さ(さ)ら(ら)う(う)て(て)は(は)の(の)背(せ)中(ちゆう)と(と)あ(あ)つ(つ)て(て)く
後(あと)さ(さ)う(う)あ(あ)つ(つ)て(て)は(は)の(の)中(ちゆう)あ(あ)つ(つ)て(て)い(い)ら(ら)う(う)
は(は)身(み)ま(ま)あ(あ)つ(つ)て(て)さ(さ)う(う)く(く)廣(ひろ)い(い)日(ひ)中(ちゆう)あ(あ)つ(つ)て(て)い(い)
いと(と)の(の)い(い)ら(ら)う(う)て(て)い(い)ら(ら)う(う)て(て)い(い)ら(ら)う(う)て(て)い(い)ら(ら)う(う)
あ(あ)つ(つ)て(て)い(い)ら(ら)う(う)て(て)い(い)ら(ら)う(う)て(て)い(い)ら(ら)う(う)て(て)い(い)ら(ら)う(う)
不(ふ)び(び)も(も)あ(あ)つ(つ)て(て)い(い)ら(ら)う(う)て(て)い(い)ら(ら)う(う)て(て)い(い)ら(ら)う(う)て(て)い(い)ら(ら)う(う)
は(は)の(の)あ(あ)つ(つ)て(て)い(い)ら(ら)う(う)て(て)い(い)ら(ら)う(う)て(て)い(い)ら(ら)う(う)て(て)い(い)ら(ら)う(う)
う(う)け(け)後(あと)の(の)骨(ほね)の(の)つ(つ)ま(ま)あ(あ)つ(つ)て(て)い(い)ら(ら)う(う)て(て)い(い)ら(ら)う(う)て(て)い(い)ら(ら)う(う)
仁(に)ま(ま)あ(あ)つ(つ)て(て)い(い)ら(ら)う(う)て(て)い(い)ら(ら)う(う)て(て)い(い)ら(ら)う(う)て(て)い(い)ら(ら)う(う)

南なのな方かたより夜やのよのよと年としにおつて
停とどまるわるおなるたるお令あま實まことにんせむも
手て付つけるわるとくもわると出来でるお令あまもぬ
くでまげ着かけてあんどてあらうお令あまが始
からんといふ今いま十九じゅうのぢうぢうお令あまが
わらうて今いまさらにきなさも出だと
うまく切ておりびびおまさとくをり
俄あまらづらして何なにもあらなきとらと
松まつが方方かたをまてたアアわらのはらと後のちには
からんといふ細こまくはてそわがまわるあんはらと
わらんといふいづるそわらいおまらるあらう
ゆらてまじびようの様様ようとてまり
まじびようの様ようとてまり
んの鏡かがみとからて梳とりくり被おりあ

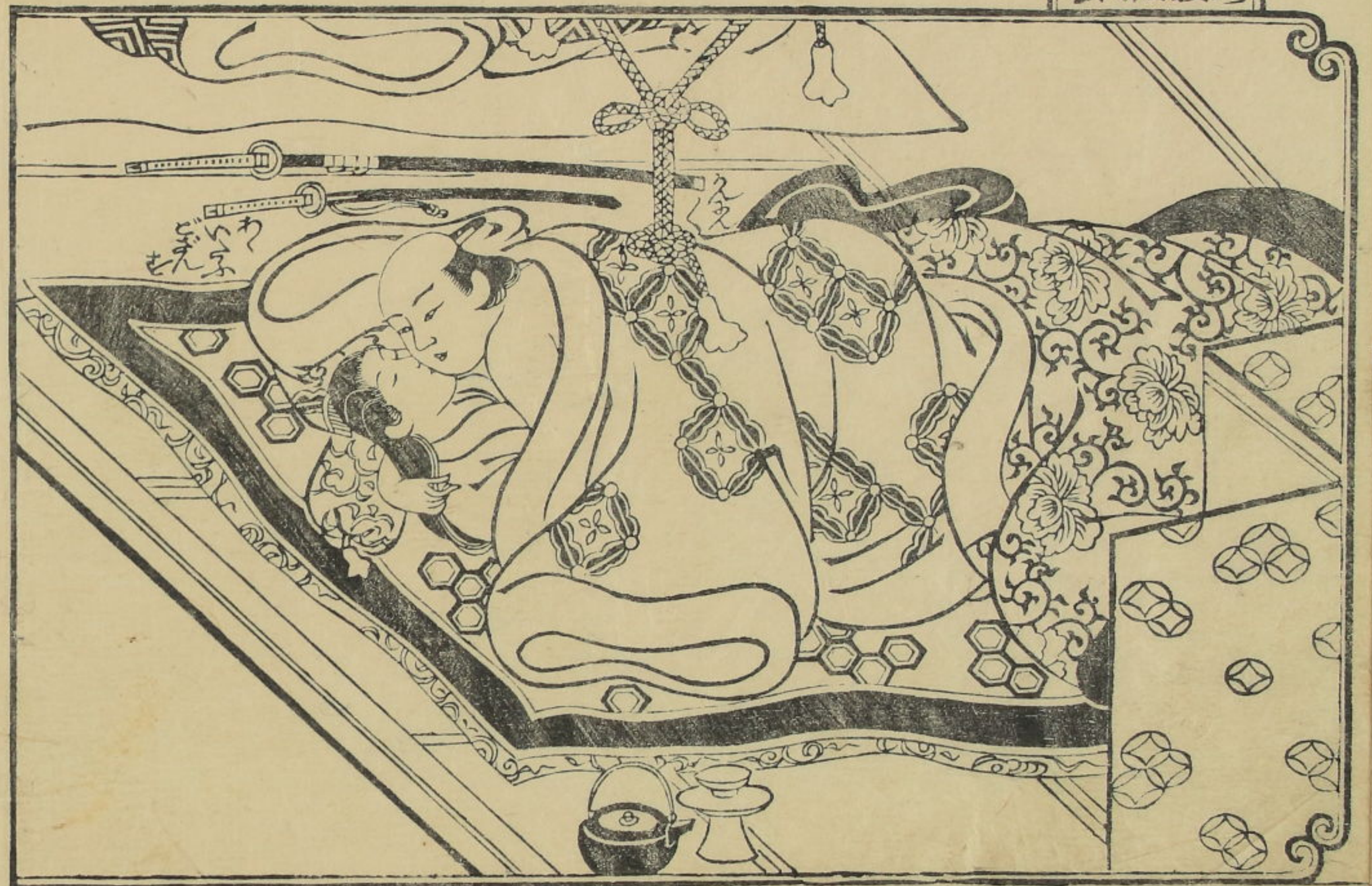
ト女おんなのつまて婚よめとまのまらしめてあらうと
傳つたへと令あまのまらしめてあらうと
まらしめてあらうとのまらしめてあらうと
中なからまらしめてあらうとのまらしめてあらうと
令あまのつまて婚よめとまのまらしめて
令あまのつまて婚よめとまのまらしめて
こもあらうとのまらしめて
わらうとのまらしめて
の紙子こと大振おりとてしめしめして
そらの松が始とわらいふも松まつの
らんといふのまらしめてあらうと
松まつのまらしめて
まらしめてあらうと
まらしめてあらうと

いふは、
あつた容を、
くとして、
柄方の娘、
事よび、
の、
度、
社、
肥、
帯、
あ、
は、
う、
よ、

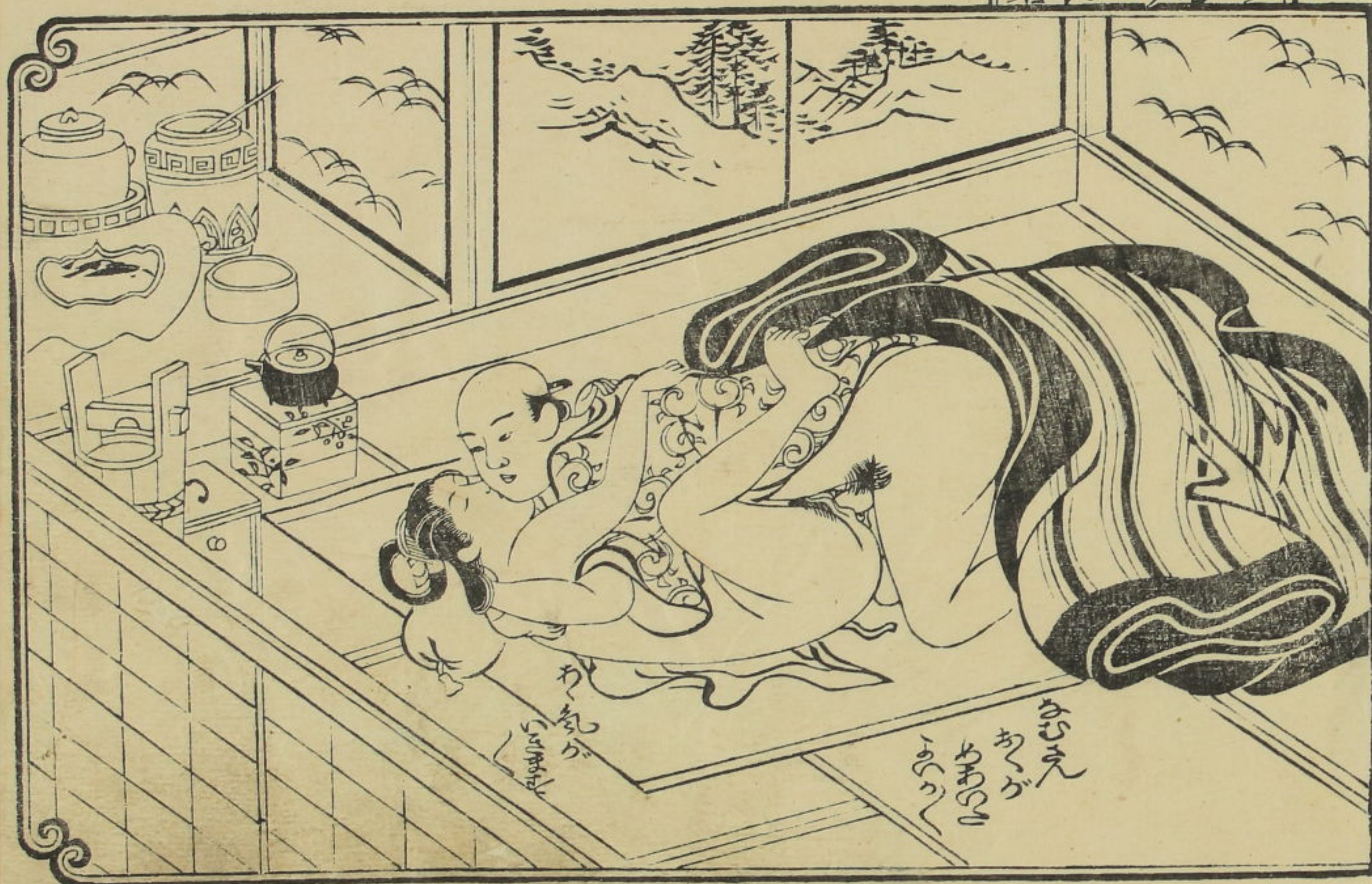
自、
と、
ふ、
ろ、
あ、
ら、
ま、
口、
く、
あ、
あ、
女、

系^{いしやう}あやま^くの^{せき}敷^してある序^ぎ振^りよ^り花^{はな}よ
疾^{よまど}ふとん^{ほりや}練^り業^ぎの^{しん}入^り場^ばは^まき^ぶ杯^{はひ}よ^り紙^しの
の^ちこ^はし^らげ^り何^{なん}種^{しゆ}し^らあ^まく^る音^{おと}別^{べつ}也^{なり}也^{なり}也^{なり}
と^して^おま^うく^らの^かこ^も松^{しょう}か^か柳^{りゅう}や^う海^{うみ}と^とま^を
と^らお^のま^まも^のち^るあ^まに^しお^しお^し被^ひ引^ひ
ま^まで^しお^のま^まの^しん^んま^まい^か一^と
あ^まな^いび^りの^らへ^のに^らび^きと^もら^うた
ら^いわ^ぬと^さの^のか^りて^さら^めね^られ^て松^{しょう}
を^もわ^とり^した^らも^もも^も暴^{ぼう}ら^した^らい^て
ま^まさ^しお^もく^と目^め敷^しく^ある^る程^{ほど}あ^まと^ま
と^とら^いし^まら^ばは^わい^ちあ^さら^うく^あら^う
あ^まし^てあ^まり^らい^るこ^のち^よに^まあ^しま^なも
あ^まり^もあ^まり^もあ^まり^もあ^まり^もあ^まり^も
あ^まり^もあ^まり^もあ^まり^もあ^まり^もあ^まり^も
あ^まり^もあ^まり^もあ^まり^もあ^まり^もあ^まり^も
あ^まり^もあ^まり^もあ^まり^もあ^まり^もあ^まり^も
あ^まり^もあ^まり^もあ^まり^もあ^まり^もあ^まり^も
あ^まり^もあ^まり^もあ^まり^もあ^まり^もあ^まり^も
あ^まり^もあ^まり^もあ^まり^もあ^まり^もあ^まり^も

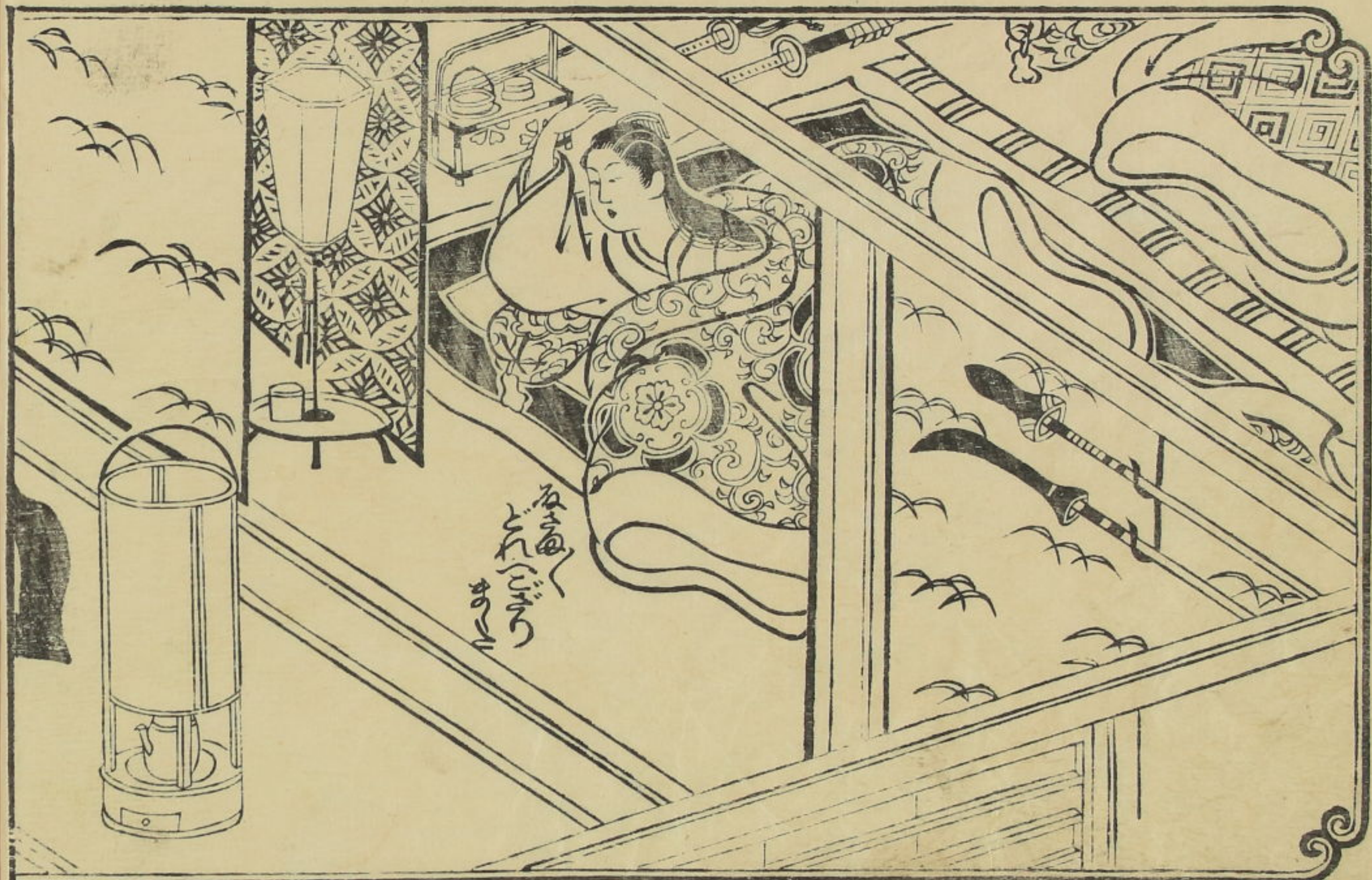




柔石の女

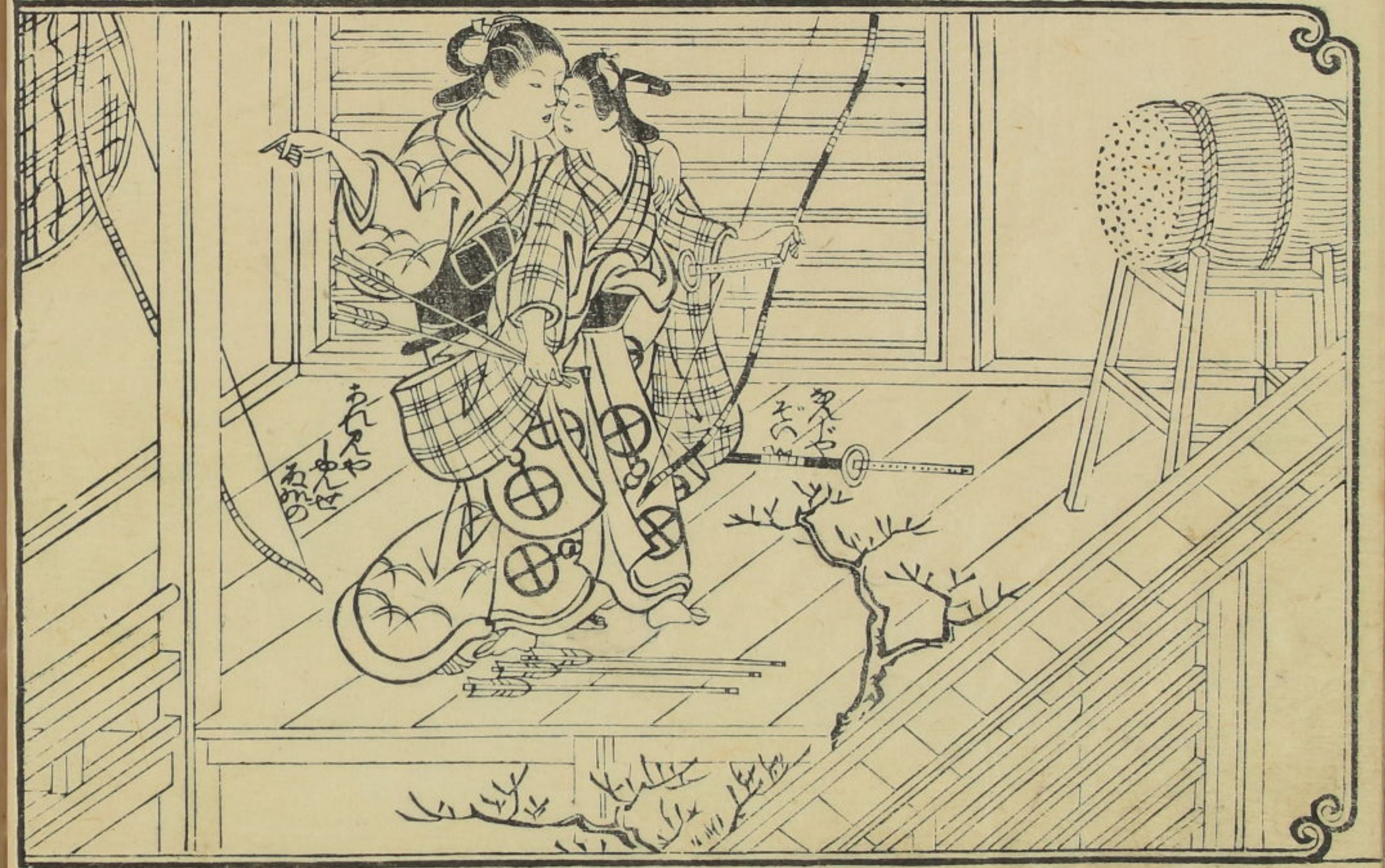


かたが
あつ
あつ
あつ
あつ

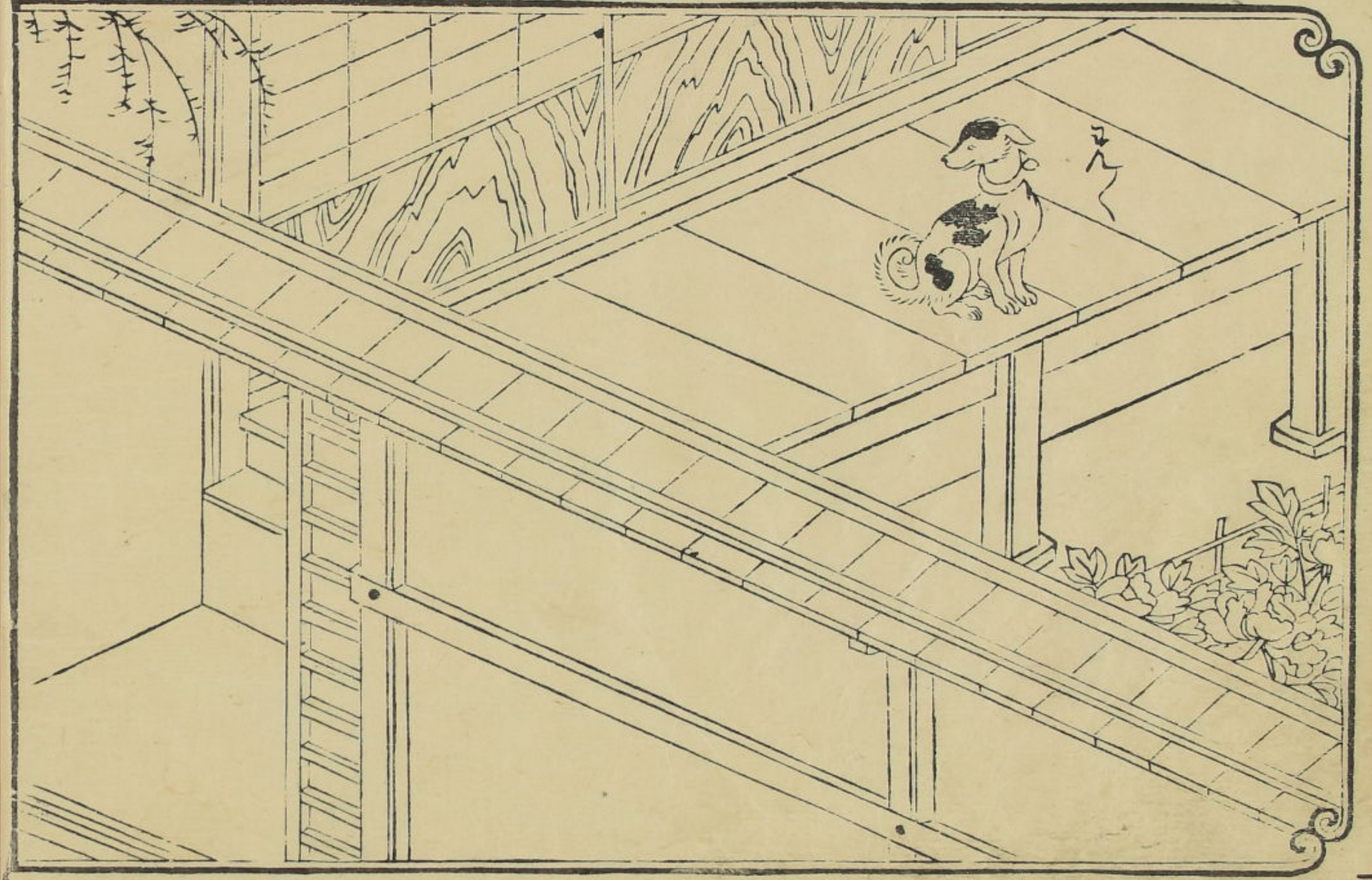


あつ
あつ
あつ
あつ

金庫の裏



二公色表婚



盆の夕



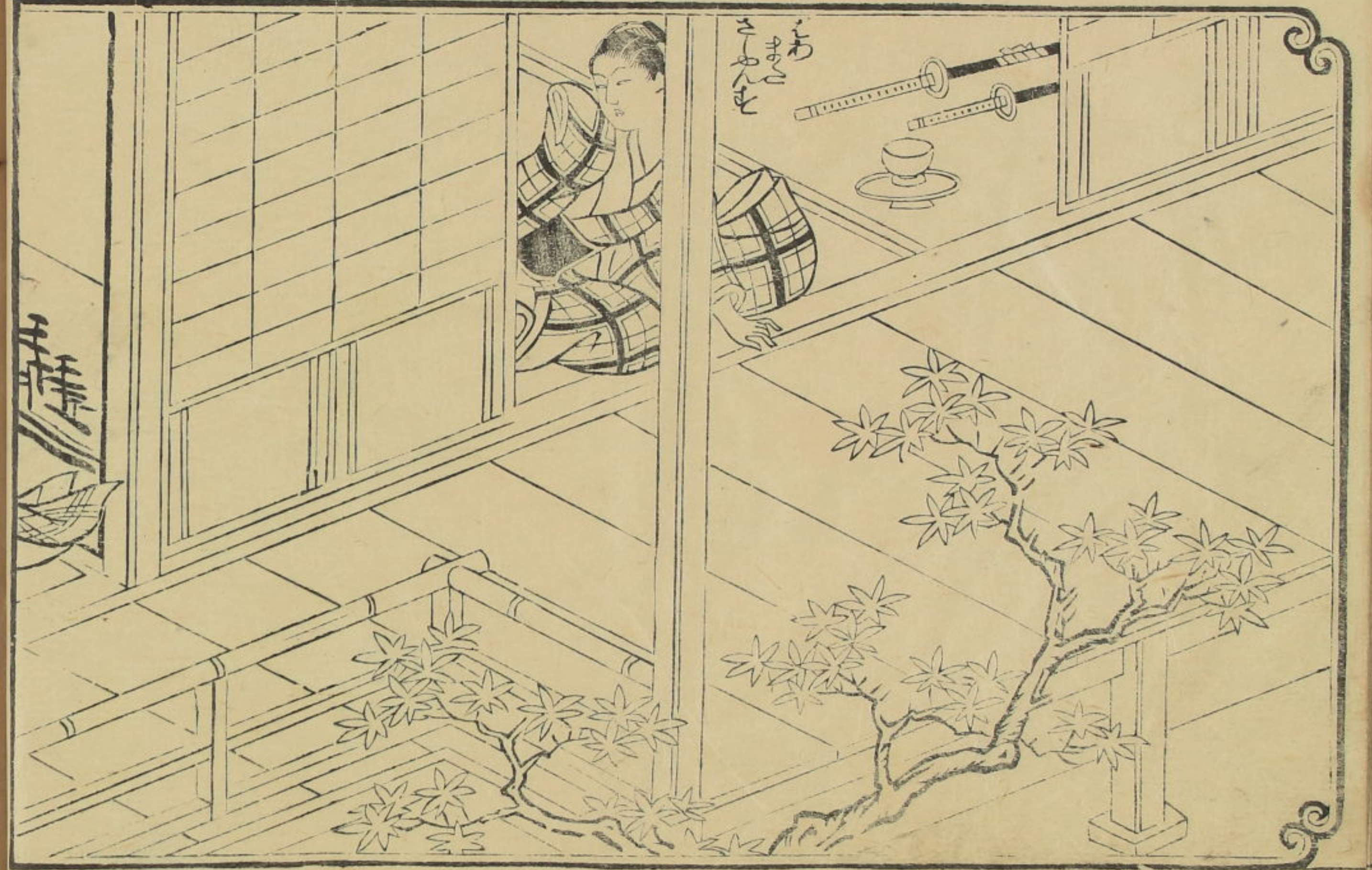
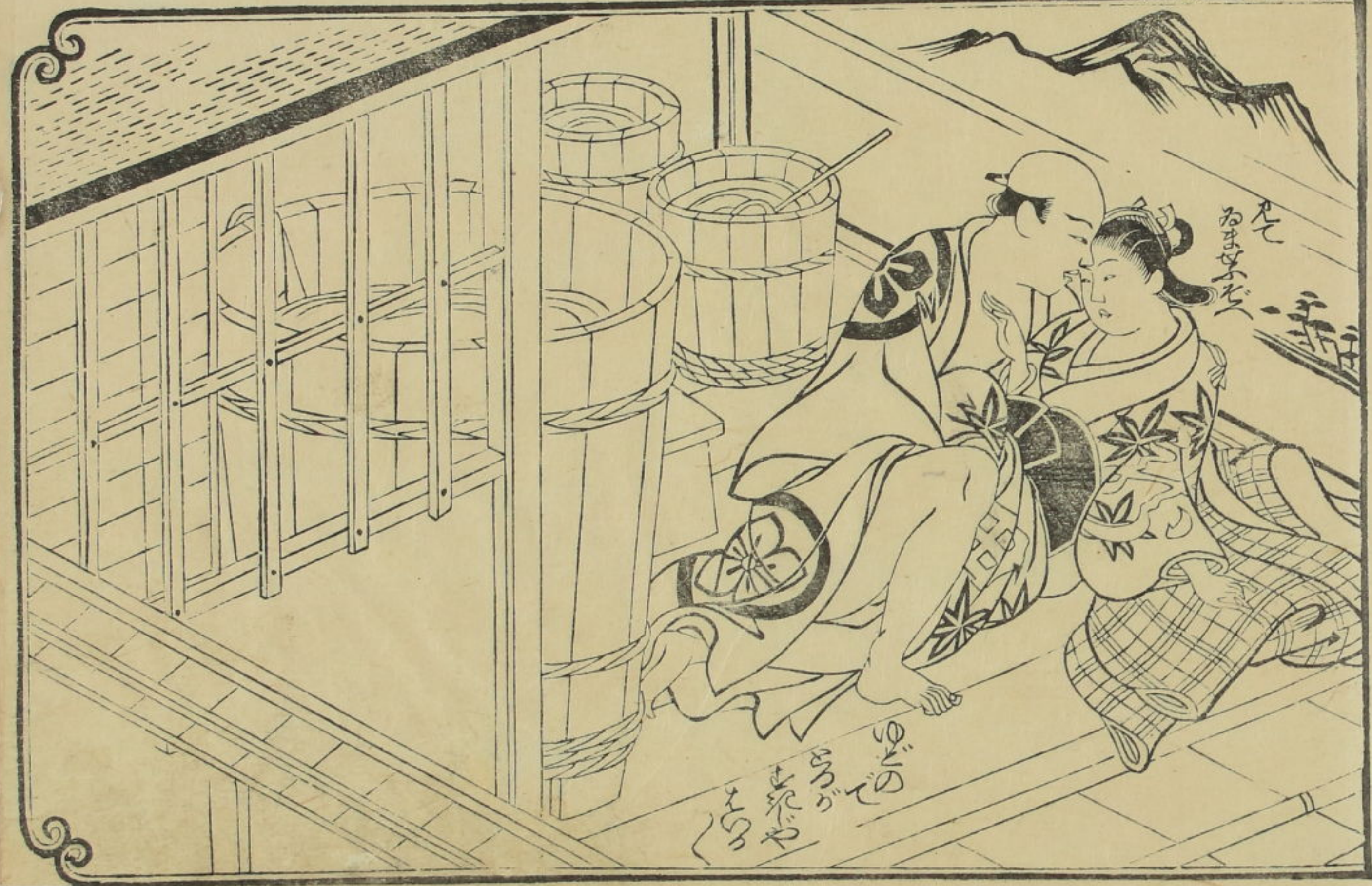
あき
の
つゆ



あき
の
つゆ

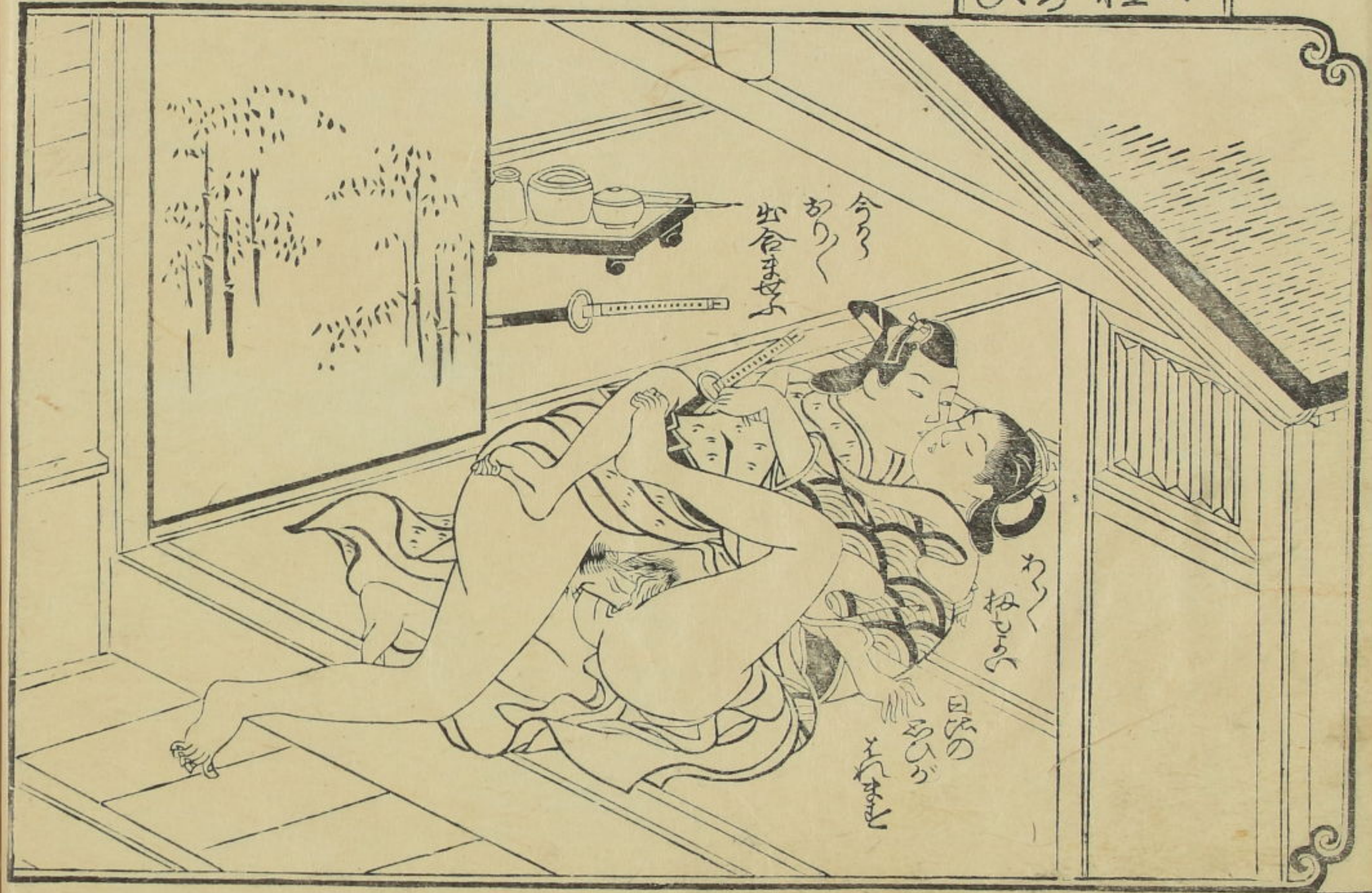
あき
の
つゆ

湯石屋



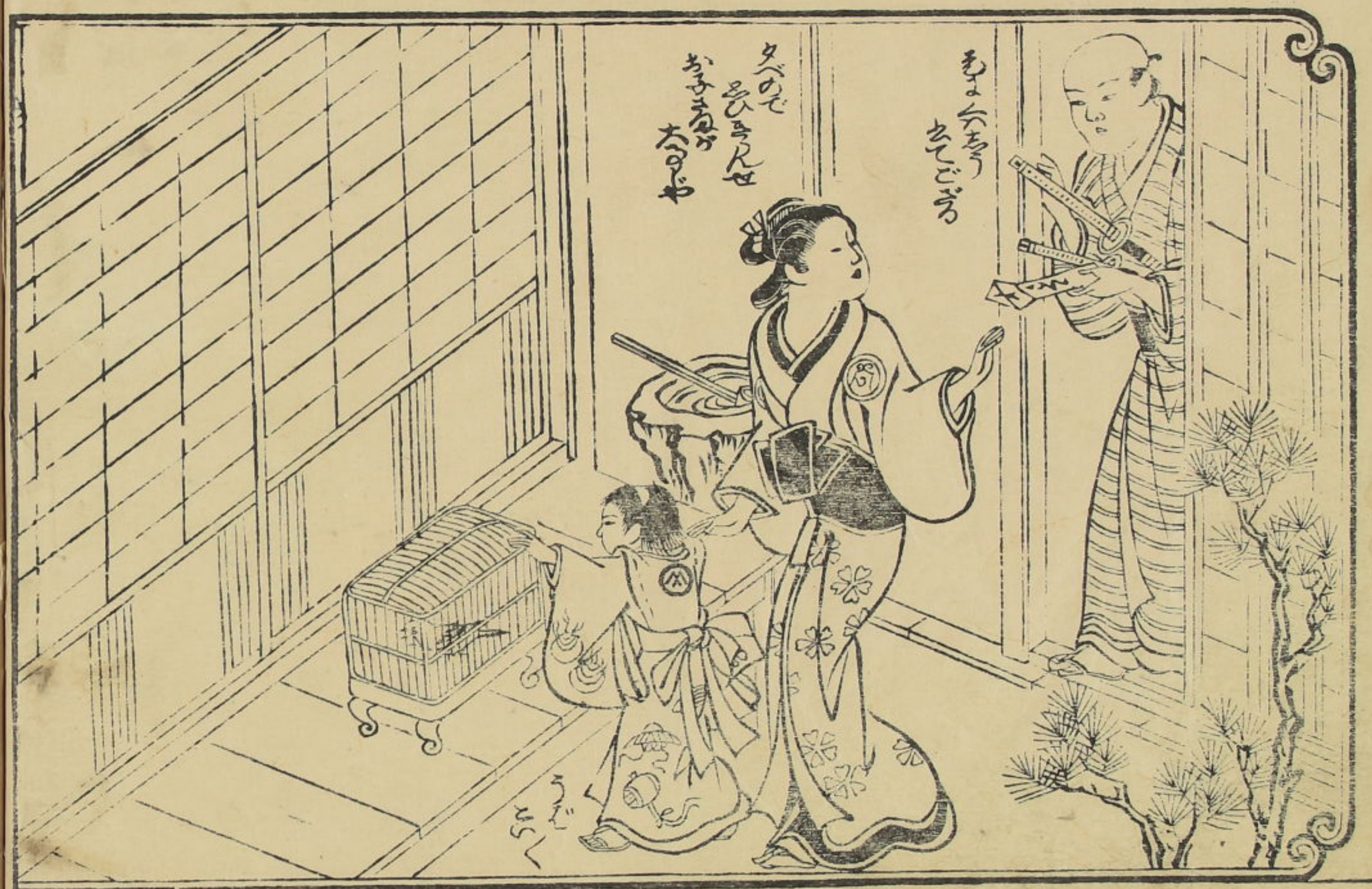
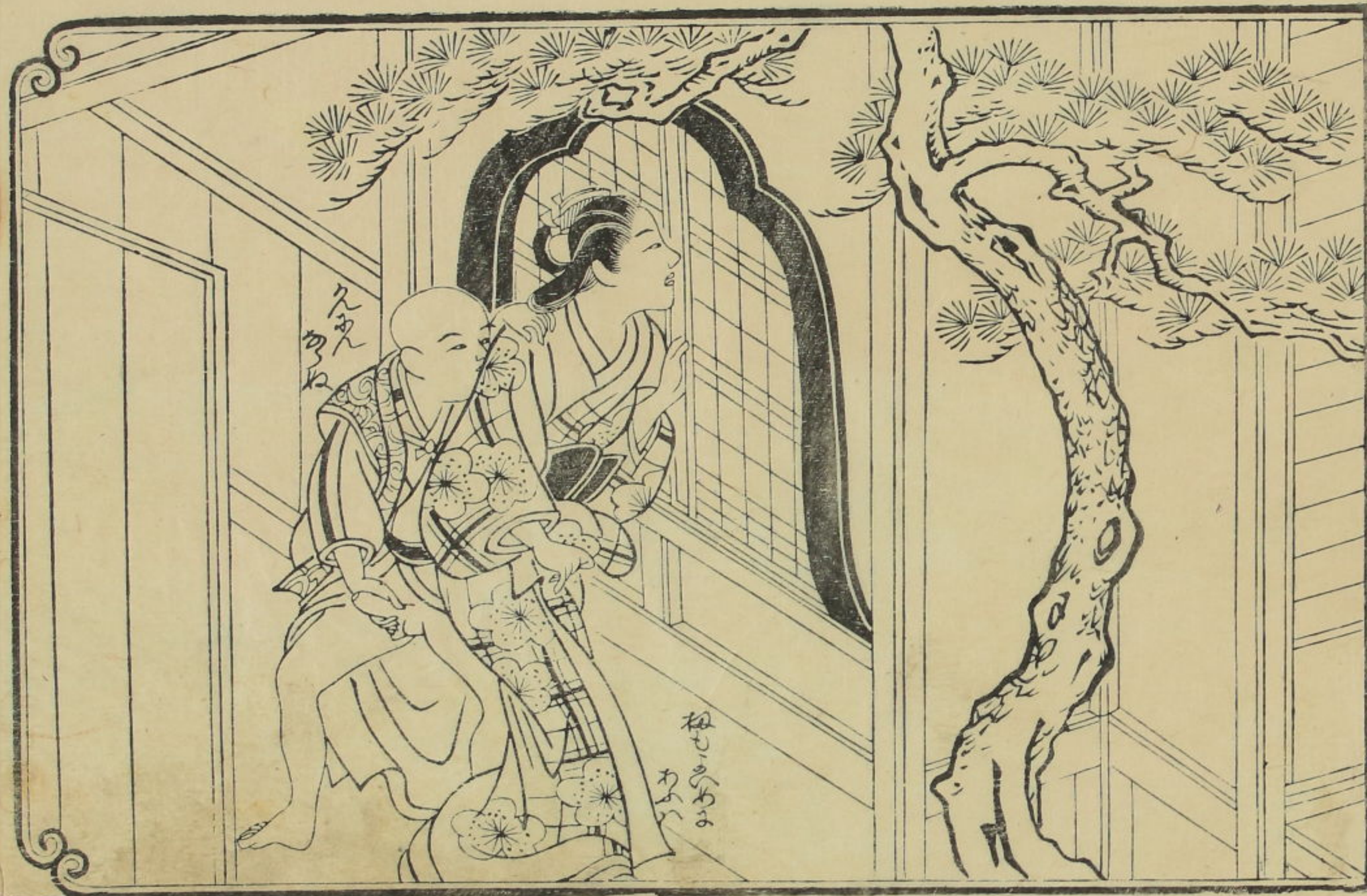


小性 びん



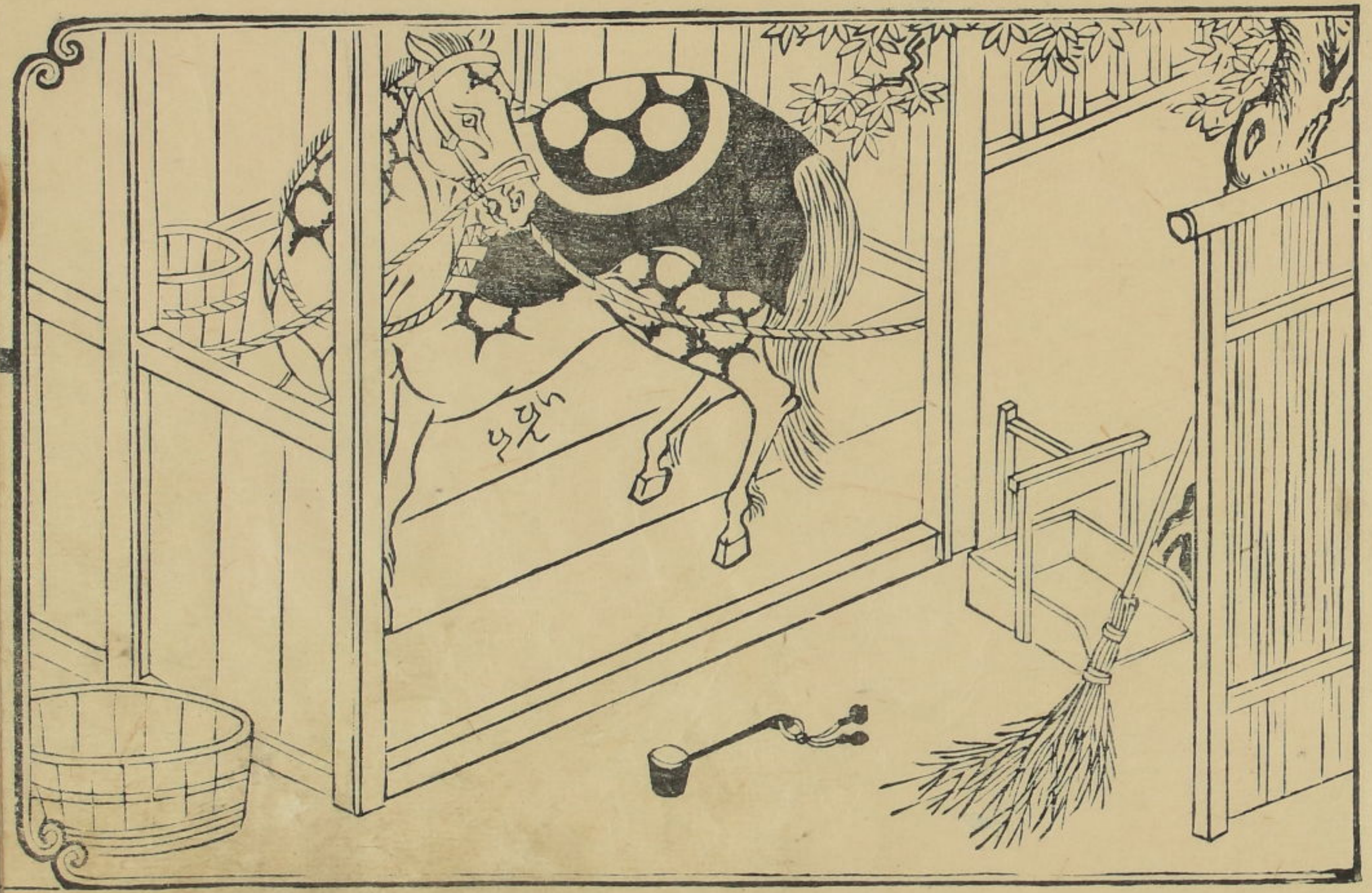
やのき







紅衣女



湯

勝えよのびじりあさう大お

先祖の武士の宰人として生まれ付いた女
と云う日づけはめでたきお月ごのやうあけり
うらめおめいあつたおれど老南多寡
お月ごはるで男の子よりお娘の子より
けるやうにまごうは親つとつううわらふ
ごう女のふれお親く磨こと月ごやうに男
子といふ程でまごう人の伴おあつたものこ
ん程おつちいふ程あつたふくやく役もま
つた時おまのむせね親の養を磨て兼お
どうたらごうごびじり人のおつたやう
あつて流し親をまごう親あつたおつた伴せ
うらうんかよびじりお親十月の節にまごう

おわびごれおつちも餓もまてけも親の
入とも月ごお娘よおのよひへお娘の子
と云お娘のあつたお極つてひとりおまの
後目お娘といふお極よおまごう親
娘のよまけつたおとせめてお女も
そごうてお世風倍おまのりて裸でお
といひお程おれお合おお男おつたお
お女お親おつて鼻おつて胸おつた
あつて年のおつたおつたおつたお
親つたおつたおつたおつたおつた
つたおつたおつたおつたおつた
らつたおつたおつたおつたおつた
おつたおつたおつたおつたおつた
おつたおつたおつたおつたおつた

百代の橋え終つとてやま女を尋ね下と云
しめいづかしてあもらうか乳の人いけ下と
うやうて大旦那の御妻の疾お袋の青
海人の御いそふ乳がまひりてお新登に世
よりの長後橋と成りしむらあのかのけさね
葵うとぬぬいそがぬ月日ちきてぬまに
あり定めれきりの出整の権が柵と成てけ
別とてか入二年格の世とていしよあも
女の性とお袋いひしむらお袋に成て
わの世とていひしむらあもらうか
かえよらとておいとぬぬらうけらよの島
ふ疾いしそふ方便あぐらに回ぬの町
とらきよ裏柵うてぬびてひぬあも
あろとて又同くぬぬらうらあもらう

色も増つてつうた親よあつた目影と
ぬびて来ぬれぬも一ヶとれてあつた
やうにちぢり其の疾れもつたよあびら
目のあつた根て世のちもあつたあ
たごいあもらうらうぬぬあつた
い女よあふと仕事あつてらうぬぬあ
大旦那のお登形よ後の入目されぬぬ
か中よあつた下とてぬぬあつた親の若
あつたあもらうぬぬあつた毎日むら
うとてぬぬあつたあつたあつた
縁のひぬぬあつたあつたあつたあつた
とて毎年の佳例とてあつたあつた
つたあつたあつたあつたあつたあつた
あつたあつたあつたあつたあつたあつた

のつて事て法身ほふしんは密傳みつでんあつてせめてほり
 隣となりもくわらうとほりしきそて人の命と
 むらひひしよまじりしきぞのひんふまじり
 わいさふりて終つひよあつてあつてさく
 づかひもあつて終つひよあつてあつてさく
 さてあつてあつてあつてあつてあつて
 欠ひてあつてあつてあつてあつてあつて
 みもあつてあつてあつてあつてあつて
 ぶんう親里おんりにわづつてあつてあつてあつて
 けつてあつてあつてあつてあつてあつて
 志しのれ松末まつまの終つひよあつてあつてあつて
 別難べつなんの終つひよあつてあつてあつてあつて
 世よと恨うらみてあつてあつてあつてあつてあつて
 吟ぎんの終つひよあつてあつてあつてあつてあつて

いらぬ物の終つひよあつてあつてあつてあつてあつて
 別難べつなんの終つひよあつてあつてあつてあつてあつて
 わいさふりて終つひよあつてあつてあつてあつてあつて
 むらひひしよまじりしきぞのひんふまじり
 わいさふりて終つひよあつてあつてあつてあつてあつて
 づかひもあつて終つひよあつてあつてあつてあつてあつて
 さてあつてあつてあつてあつてあつて
 欠ひてあつてあつてあつてあつてあつて
 みもあつてあつてあつてあつてあつて
 ぶんう親里おんりにわづつてあつてあつてあつて
 けつてあつてあつてあつてあつてあつて
 志しのれ松末まつまの終つひよあつてあつてあつて
 別難べつなんの終つひよあつてあつてあつてあつてあつて
 世よと恨うらみてあつてあつてあつてあつてあつて
 吟ぎんの終つひよあつてあつてあつてあつてあつて

るものつゝびてなれと吟を隣へつらうて
親父の孫次さまよびよきびあつて病
書は生きたれわれど我富中へど
心く家来たまふゆが居るゆゑとてわぬ
まじい妻よは西へ来るまふまきつゝ病
け病とわけて女の中へかれ居て書生
じるといられて女中あて不義と働がる
よと負わると親へようといはるゝわ
いうあつてもめらつてなれまゝのまね
中へ女病書生の中へかまてつゝ
ままうと尋ねれば孫次さま子細と申す
繫がはれど此の家のつゝ場さかさま
わあこの女中よわれびか役抱てつゝ
こととつゝ細子よ科もせられ敵犯討のさめ

まづの病治とてつゝるべのつゝ毎日
病治よよびまふつゝのつゝ病治
中後まらうとつゝにわつゝ病治とて
下ろせやうに病治の入佛中とつゝ
かみあつてつゝつゝつゝつゝつゝ
このつゝつゝつゝつゝつゝつゝ
今書の中へつゝつゝつゝつゝつゝ
候ことつゝつゝつゝつゝつゝつゝ
つゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝ
うちつゝつゝつゝつゝつゝつゝ
おつゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝ
わのつゝつゝつゝつゝつゝつゝ
あはれつゝつゝつゝつゝつゝつゝ
つゝつゝつゝつゝつゝつゝつゝ

何れにあらばしるべきに
一は其の語に因て其の意を
尋ねて之を知るに
二は其の語に因て其の意を
尋ねて之を知るに
三は其の語に因て其の意を
尋ねて之を知るに
四は其の語に因て其の意を
尋ねて之を知るに
五は其の語に因て其の意を
尋ねて之を知るに
六は其の語に因て其の意を
尋ねて之を知るに
七は其の語に因て其の意を
尋ねて之を知るに
八は其の語に因て其の意を
尋ねて之を知るに
九は其の語に因て其の意を
尋ねて之を知るに
十は其の語に因て其の意を
尋ねて之を知るに

此の書は其の意を知るに
一は其の語に因て其の意を
尋ねて之を知るに
二は其の語に因て其の意を
尋ねて之を知るに
三は其の語に因て其の意を
尋ねて之を知るに
四は其の語に因て其の意を
尋ねて之を知るに
五は其の語に因て其の意を
尋ねて之を知るに
六は其の語に因て其の意を
尋ねて之を知るに
七は其の語に因て其の意を
尋ねて之を知るに
八は其の語に因て其の意を
尋ねて之を知るに
九は其の語に因て其の意を
尋ねて之を知るに
十は其の語に因て其の意を
尋ねて之を知るに

とうめいそこのうゝひき起しなれど下衣と
 まがしめてききとるれきき傍のつまみ手物
 に火きりしてききりうほりぞととまのき
 入るるいきき傍の九裸よあてききうま
 られて圓月あしそききまもていそあつた
 次のるまき始とみ疾へきも裸であつた
 男とあつてゐるまきいそあつたあつた
 おゆもは神とて真とまもあつても他人の
 入ぬこそは合ふれとま疾のうまあつた
 してさうとまきをば疾も平余して
 尻と軽と親に健とて二房あつたあつた
 書よむりて相生の和とまきあつたあつた
 かつらゆ甲ぞめであつたあつた

武家風流

